

- 日 時：2018年11月4日（日）永眠者記念礼拝
- 場 所：立川教会
- 説教題：「罪の増すところに、恵みは一層満ちあふれる」
- 聖 書：旧約 創世記9：8－17（旧 p11）
新約 ローマの信徒への手紙5：12－21（p280）
- 讃美歌：385「花彩る春を」354「天の神、祈ります」

お早うございます。

今日の礼拝は、永眠者記念礼拝と言う特別な礼拝で、67年の歴史を持つ立川教会関係者で、すでに神様の御許に帰られた方を覚えて、今一度それらの先達の信仰の軌跡を思い起す時です。あるいは又、洗礼は受けなかったけれども、教会員が祈りに覚えていた方々の歩みを思い起す時でもあります。

今日与えられた聖書の御言葉は、ローマの信徒への手紙第5章12節から21節です。

とても長い箇所ですが、その中の一節、今日の説教題にも掲げましたが、20節の後半の「罪が増したところには、恵みはなお一層満ちあふれました」について、考えてみたいと思います。

私は、70年の人生を振り返る時、その中で一番多感であったのは、高校生時代ではなかったかと思います。現実とは切り離されたところで、死を考え、あるいは愛について良く考えていました。夜眠る時に、このまま朝になっても目が覚めなかったら・・・、との思いに捕らわれ、母との別れなどを想像し、何度も泣いたことを覚えています。

死とは、別れです。

やはり同じ頃、読んだ本の中に、宗教学者の岸本英夫さんが書いた『死を見つめる心』がありました。その本の中で、岸本さんはがんに侵され、間もなく人生を終える自分の現実を見つめながら、私たちには、人生の途上において、出会いがあり、別れがある。出会うと言うことは、必ず別れが訪れることでもある。死とは、別れの時であり、ただそれが永遠の別れに過ぎないのだと言っていました。高校生であった私は、その本を読み終えて、死を見つめる一つの生き方であると思ったものでした。

しかし、その時も感じたのですが、今はなお一層思うことがあります。

岸本さんのその考え方は、何か消極的なのです。

寂しいのです。

人生を達観したと言え、聞こえは良いのですが、私たちキリスト者の死を見つめる心とは何か違うのです。

一体何が違うのでしょうか。

岸本さんは、死を見つめる己の心の目を、自分が歩んで来た道、過去に向けています。それ故に、死は、自分の生の営みを終わらせる力、しかも決定的な力、この世の権力全てを握り、莫大な富をどれだけ積もうとも、決して乗り越えることの出来ない力として受け入れます。人間は死の前には無力であることを悟り、その結果、死とは、別れである。ただそれが永遠の別れに過ぎないと言うのです。

一方、キリスト者にとっての死とは何でしょうか。

そのことを記しているパウロの言葉があります。

フィリピの信徒への手紙第 1 章 21 節から 26 節です。(p362)

21：わたしにとって、生きることはキリストであり、死ぬことは利益なのです。

22：けれども、肉において生き続ければ、実り多い働きができ、どちらを選ぶべきか、わたしには分かりません。

23：この二つのことの間で、板挟みの状態です。一方では、この世を去って、キリストと共にいたいと熱望しており、この方がはるかに望ましい。

24：だが他方では、肉にとどまる方が、あなたがたのためにもっと必要です。

25：こう確信していますから、あなたがたの信仰を深めて喜びをもたらすように、いつもあなたがた一同と共にいることになるでしょう。

26：そうなれば、わたしが再びあなたがたのもとに姿を見せるとき、キリスト・イエスに結ばれているというあなたがたの誇りは、わたしゆえに増し加わることとなります。

この箇所に記されているパウロの言葉は、キリスト者全てにおいて「アーメン」「その通りです」との告白となる言葉です。死とは、この肉体の死によって、確かに肉体は朽ちて行きます。しかし、肉体の死をもって、私たちの人生は終わるものではありません。パウロは、むしろ死を恋い焦がれています。なぜなら、肉体の死は、霊的な復活を意味し、神の国に迎え入れられる新たな始まりとなり、そこでは、復活した主イエス・キリストとの再会が約束されているからです。

死は、罪が支払う報酬です。

罪から自由な人間はいません。

人を傷つける言葉、妬む心、疑う心、自分さえ良ければ良いと言う思い……。

どれだけ努力しても、そのような内なる悪の誘惑を退けることは至難の業です。

再びパウロの言葉が聞こえてきます。

ローマの信徒への手紙第 7 章 18 節～24 節です。(p283)

18：わたしは、自分の内には、つまりわたしの肉には、善が住んでいないことを知っ

ています。善をなそうという意志はありますが、それを実行できないからです。

19：わたしは自分の望む善は行わず、望まない悪を行っている。

20：もし、わたしが望まないことをしているとすれば、それをしているのは、もはやわたしではなく、わたしの中に住んでいる罪なのです。

21：それで、善をなそうと思う自分には、いつも悪が付きまとっているという法則に気づきます。

22：「内なる人」としては神の律法を喜んでいますが、

23：わたしの五体にはもう一つの法則があつて心の法則と戦い、わたしを、五体の内にある罪の法則のとりこにしているのが分かります。

24：わたしはなんと惨めな人間なのでしょう。死に定められたこの体から、だれがわたしを救ってくれるのでしょうか。

そのような己の心の闇を見つめる時、そこには絶望しかありません。

そして、全ての希望を失った時、人は生きて行くことが出来ません。

しかし、その時です。

神様は、私たち一人ひとりの名を呼び、御前に立たせ、宣言されるのです。

いかに罪深くある者であっても、いや己の罪に深く目覚め、打ちひしがれている者であればなおのこと、「お前の罪は赦された」と。「私は、お前の罪を赦すために、私の独り子のイエスを十字架に架けたのだ」との神様の声が響くのです。

死は、人生の終わりではありません。

肉なる人生の終わりではあっても、新たな霊なる人生の出発なのです。

そして、霊なる人生への旅立ちの喜びは、星の数のような先達たちが証ししています。

それだけではありません。「罪が増したところには、恵みはなおいっそう満ちあふれ」るのです。

即ち、どれほど罪深い人間であっても、そしてその罪の故に、黄泉の底に沈んでいても、主イエス・キリストは、それよりさらに深く黄泉に降り、私たちを引き上げて下さるのです。罪が深ければ深いほど、恵みは一層増し加わるのです。

最後に、ヨハネによる福音書第3章16節をお読みし、祈りましょう。

16：神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである。」

祈りましょう。

